

障害者福祉施設におけるスタッフのポジティブな介入が 利用者の行動的 QOL およびスタッフ自身の ワーク・エンゲイジメントに与える効果

Effects of Positive Interventions by Supporters in Welfare Facilities for Persons with Disabilities on
Users' Behavioral Quality of Life and Supporters' Work Engagement

杉山 朝太郎 中鹿 直樹

Asataro Sugiyama Naoki Nakashika

(立命館大学人間科学研究科)

(Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University)

Key words: 賞賛行動, ワーク・エンゲイジメント, 行動的 QOL

問題と目的

障害者福祉施設における従来の研究では、利用者の問題行動やスタッフのバーンアウトといったネガティブな側面に焦点が当てられてきた。本研究では、利用者の行動的 QOL とスタッフのワーク・エンゲイジメン (WE) というポジティブな指標を採用した。WE の向上には、スタッフが利用者の肯定的な側面に対し、能動的に注意を向ける援助が有用である。そのため、スタッフが利用者の「できる」ことを記録すること、そして、自らの賞賛行動を記録することの 2 つを介入とし、それらが利用者の行動的 QOL を拡大させるとともに、スタッフ自身の WE を向上させると仮説を立て、研究を実施した。

方法

セッティング 障害者地域活動支援センターで、およそ 3 ヶ月間実施した。

参加者 上記施設の利用者 3 名とスタッフ 3 名が研究に参加した。

介入 スタッフに (a) 利用者の「できる」ことの発見・記述・共有, (b) 自身の賞賛行動の記録, を求めた。

研究デザイン AB デザインを用いた。

従属変数 ①利用者の活動レポーター：施設利用場面での新規活動数の増加を行動的 QOL の拡大とみなした。
②問題行動：参加者 A のみ大声と暴言の問題行動がスタッフより報告されたため従属変数とした。

③スタッフの WE：スタッフにユトレヒト・ワークエンゲイジメント尺度への回答を Pre(研究直前), BL (BL 測定後), Post (介入後) の 3 回実施した。

社会的妥当性 介入後、スタッフに 11 項目 (5 件法) の多肢選択式の質問項目と 1 人 20 分間のインタビューを実施した。

結果と考察

参加者 B, C については、介入後、活動レポーターが拡大傾向にあったのは、スタッフの賞賛行動と彼らがスタッフを手伝っているという既存の行動がマッチし、そのような行動がより増加したためである。一方、参加者 A については、活動レポーターはわずかな拡大が見られたが、問題行動の生起頻度には変化が見られなかった。これは、A は服薬後、過眠などの不活性な状態になり、スタッフが「できる」ことの発見や、賞賛行動を生起させづらかったためである。スタッフの WE については、BL から Post にかけて参加スタッフ F が介入での記録によって、内省が促されるという理由で負担を感じ、減少した。本研究では、主体的な行動が行動的 QOL, WE 双方の向上に重要であると示唆された。今後は、より主体的な行動を支援するための研究が求められる。

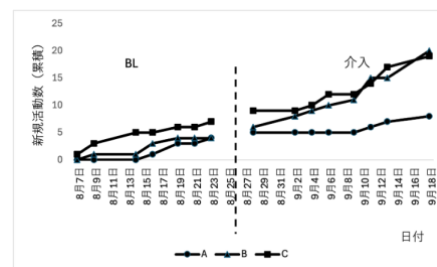


図 1 利用者の活動レポーターの推移 (累積)

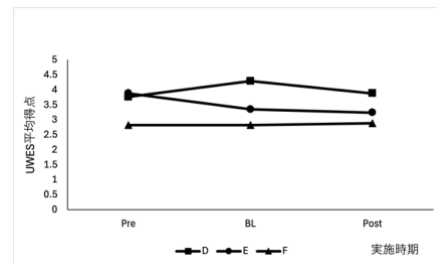


図 2 スタッフの UWES 平均得点の推移